

14. 新大陸発見第三説

新大陸発見の説はもう一つあります。アメリカ大陸を最初に発見したのは中国人だという説で、いかにも中国人が主張しそうですが、この説を主張するのはイギリスの歴史学者ガビン・メンジースで、更に同じイギリス人のギャヴィン・メンジースという海軍軍人が退役後 120 を超える国、900 以上の資料館、博物館、大学等を丹念に調査、研究を繰り返し、「1421」というタイトルの本を 2002 年に出版しており、我が国でも 2003 年 12 月翻訳版が出版されております。早速購入して読みましたが、其の膨大な資料に圧倒され、また海軍軍人の専門的知識に感心しながら読みました。



タイトルの「1421」は、1421 年 2 月 2 日、この日は中国の暦で元日、(春節)にあたり、天子たる明朝三代目「永楽帝」に臣従の礼を尽くすべき、各国、アジア、アラビア半島、アフリカ、インド洋沿岸各国から訪れた国王は 28 名とその使節が一堂に会し、貢ぎ物を献上し、臣従の誓を行ったのです。まさにこの当時の中国は世界に冠たる大中華国家だったのです。

各国の国王、使節、膨大な献上品を運んだのが、鄭和が指揮する中国の大艦隊です。中国製の六分儀、羅針盤を装備し、正確な技術で大洋を航行し、沿岸の海図は中国沿岸はもとよりアラビア半島、アフリカ南端まで正確に描かれていたようです。

この日は城壁に囲まれた神秘の紫禁城の完成披露でもあり朝貢外交を確固たるものにした儀式なのです。

鄭和とは、明の時代永楽帝に仕えた忠臣で、イスラム教徒で宦官です。元の姓は「馬」で雲南の梁王に仕えておりましたが、明に侵略され捕虜となって、去勢され、宦官となって洪武帝の第四王子成祖に仕えることになり、最初は捕虜に過ぎなかったのですが、元来聡明で、慎み深く、しかも抜群の行動力によって成祖の絶大な信頼を勝ち得て側近となり、更に成祖が王位に就く闘いにも最大の功績があり、成祖は「永楽帝」となり、馬和は、永楽帝より「鄭」姓を賜り「鄭和」になったのです。

この永楽帝時代の明は最高に文化の花開き世界の大中華になったのです。

鄭和は永楽帝の 3 年、1405 年から 5 代の宣得帝の 1433 年にかけて計 7 回にわたり、2 万 7000 人の乗組員からなる未曾有の大艦隊を率いて中国からインド洋を航行しております。その目的は交易に有りますが、第六回航海は永楽帝の式典に招聘した各国の国王、使節団の送迎のために航行しております。

この六回目の航海で各国王を送り届けるためにインドを経た後、ペルシャ方面、アラビア方面、アフリカ東海岸方面と別れ、このアフリカ方面船団のうち、更に分かれた分遣隊がアフリカ南端を回って大西洋に入り北上してカリブ海沿岸を経てフロリダ沖に達し、南北アメリカ大陸を確認したとの説です。

その証拠として鄭和が 1428 年作成したといわれている地図の原版を模写した地図には南北アメリカ大陸が詳細に記載されていると主張しております。

従来の歴史認識を覆すこの説は、どこまで信じて良いのか、或いは全くの眉ツバものなのか、判断に迷うところですが、当時の中国の国力からいうと、様々な文化や科学技術、資源に恵まれ、教育水準は高く、名実ともに世界最大の文化国家であったことは間違いありません。明朝の初期、永楽帝の頃が最高で当時の技術水準はヨーロッパのポルトガル・スペイン・ヴェネツィアのそれよりも 100 年は進んでいたと評価されています。経済的裏付けからいっても巨大船を建造する背景はあったと思われます。そうするとポルトガル・スペインが躍進する大航海時代は 15 世紀後半ですから、それに先立つ数十年前、中国の大艦隊が同じ発見をしたとしても技術的におおいに頷ける史実です。

その艦隊の規模について、白髪三千丈の国柄ですから、ある程度差し引きが有るとしても乗組員 2 万 7000 人余でド肝を抜かれます。

鄭和の艦隊の編成は最も大きいものから宝船、馬船、食糧船、客船、戦艦の 5 階級で、大きさは宝船、マスト数 9 本、長さ 151.8m、幅 61.6m、小さい戦艦でマスト数 5 本、長さ 61.6m 幅 23.6m。宝船の大きさは現在の船と比べれば約 2～3000 トンの船に匹敵すると思います。

これから 80 数年後のコロンブスのサンタマリア号が 109 トンですから驚異の大きさです。そしてこの大艦隊の編成は 250 隻で乗組員総数が 2 万 7000 人ですから 1 隻の乗組員は 100 名余位でしょう。間違いなく世界史上最大の大艦隊といえます。

万里の長城や秦始皇帝陵と兵馬俑のような世界の超吃驚がある国ですから、世界一の大艦隊があっても不思議ではないのかもしれませんが。

鄭和は宦官ですから航海者ではありません。ただ指揮官としては抜群の有能さで四船団を組み合わせ、それぞれに指揮官を配し、鄭和の役職は正使太監（連合艦隊司令長官）としての役目を果たしています。この提督鄭和の記録は後年政争により殆どが焼却されてしまい、残っていないのが現状で、インドや東南アジアに残された文献に頼っているのが現状です。

明代の造船記録は残っており相当数の船が建造されたことは事実のようです。

また宝船を建造したと思われる三漢河付近の中保村から宝船のラダーストック（舵を支える柱）が出土し、その大きさが 11.07m あり、この大きさからこの舵を設置する船はデッキまでの高さ 10m 程と推定され、宝船の大きさもけして大げさでないことが裏付けられます。またこのラダーストックは北京の科学博物館に展示されております。

同じ時代の海運国であったヴェネツィアが有していたガレー船で最大の船が全長 45m、幅

6m、積み荷は最大で 50 トンですから、比較にならない大きさです。

この時代より後のコロンブス船隊の一番小型であったニーニャ号は全長 11m (40 トン) ですからラダーストックと同じ大きさとはまさに驚異です。

積載能力は 2000 トン以上、ペルシャの入り口ホルムズへ 12 週間で着いたといわれていますから、船速も相当なものです。根拠地は渤海湾の奥の塘沽港で天津市の郊外になります。我が国からの遣唐使や遣隋使もこの港へ向かった中国の古くからある港です。



残念なことは政変があり王朝が代わると、前王朝の遺産を全て破壊してしまい、鄭和の偉業の資料がほとんどなく、船の大きさ、航海の記録などが皆無なことです。